

## Gさんのシーティング援助の事例報告

### 【事例の概要】

76歳 女性

パーキンソン病 骨粗鬆症 痴呆はない。体調変化が激しくその日によって異なる。

### 【解決すべき課題】

座っていると左に傾く。日によって前のめりになるときもある。姿勢が崩れる。姿勢を維持するために、食事時など車椅子の背面シートの上からベストを着用し、ベストによって姿勢の保持をしてしのいでいる。本人が「きちんと座りたい」と言う。

### 【F S A測定の結果～2002/10/04】

現状の車椅子では座面にバスタオルを引いているのみのため、左坐骨部に圧がかなり集中。全体的に左に偏っている。長時間の座位は困難と思われ、シーティング援助の必要性があることが判断された。

### 【シーティング研究会での検討～2002/10/10】

膝関節、股関節の破壊があり、日によって体調変化がある人。

前のめりになるのは痛み、変形があるからという根本的な原因があるのではないか。

車椅子のシート状では座面がしっかりしていないので、体が傾くかもしれない。

普通の椅子やプラットホーム等に座ってもらい、車椅子との比較をしてみたい。

ある程度の硬さがあり、平らなところに座らせて傾きを見る必要がある。

車椅子の高さがあっていないのではないか。

車椅子の座面を低くして、足こぎ設定にする方法もあるが、足の痛みが出るので無理か？

### 【シーティング支援の過程】

1. いろいろなタイプの車椅子に座ってもらい、本人に意見を聞き、痛みや傾きなどを観察する。
2. 椅子に座ったときのF S Aを測定し、比較する。
3. 施設P Tによって、プラットホームに座ったときの姿勢観察や、即湾状態を確認。
4. 車椅子を今よりも座面の低いものに変えてみて、痛みや傾きなどを観察する。
5. もちろん、クッションをいろいろ使ってみる。

アセスメント用紙にそって、情報収集（2002/11/12）鈴木・チェ・長嶋

「車椅子選択支援シート」・・・評価結果55点

「ブレイデンスケール」・・・評価結果18点（褥瘡のリスクなし）

- ・身体が左に傾いている。
- ・FSA測定をすると左坐骨結節部は赤色。坐骨部の皮膚の発赤はない。

《2002/11/14》渡辺・長嶋・新橋

フランスベッドより車椅子とクッションが届く。渡辺と長嶋で調整。

- ・簡易モジュラー車椅子（スペリアJさくら）

一通りの調整はしたものの、体が斜めに傾いてしまうことや前のめりになってしまう姿勢の崩れは改善されなかった。本人も以前の車椅子の方が良いとのことで、以前の車椅子に戻す。

「スペリアJさくら」の代わりに、「ニューコンフォート」の使用を検討するが、これでは自走ができないため、「アダプト」を使用してみることに。

《2002/11/19》鈴木・チェ・長嶋

・書道クラブに参加している。1時間程度座っているようだが、体は左に傾き、車椅子駆動時は大きく前のめりになる状態。

《2002/11/20》 廣瀬先生・パーカーコーポレーションの担当者・施設の理学療法士・渡辺・長嶋

身体機能など細かな評価も行いながら、本人の意見や感想などをもとに少しずつ車椅子（アダプト）を調整していく。ティルト機能は使用していない。Gさんは傾きが軽減し、顔が前を向くようになるとともに、以前より楽に車椅子が自走できる状態になる。本人も1時間座っていても、「前の車椅子よりも格段にいい。疲れない。」（以前は1時間車椅子に座っていると、姿勢の崩れとともに体に痛みも感じていた。）とのこと。またアームレストとフットレストを外すことで、ベッド柵を使って、自力で移乗できた。今後、生活の変化とティルトは必要かなどといった車椅子のさらなる微調整に関しては観察していく。体を左右横に倒すことで、片側の臀部の除圧ができるので、リハビリも兼ねて介護計画の中に取り込んでても良いかもしれない。また体が前のめりになりがちなので、無理をさせない程度に体を起こして、前を向くように声かけを行うのもよいかもしれない。

《2002/11/21》渡辺

昨日調整したアダプトを使わず、結局、以前の自分の車椅子に座っている。フロア介護主任の話によると、マッサージさんが「自走することに主眼をおいて車椅子を調整したようだけど、Gさんは長時間座っているからあの車椅子では？」という意見があると伝えてくれた。本人は相変わらず、前にくっつくように倒れたまま、座っている。もう一度、じっくり時間をとってGさんといっしょに、ケア計画を練り直す予定。

12月中旬 アビリティーズの担当者 渡辺

フロア介護職から「起き上がり車椅子への移乗時にベッドに移乗バーがあったらもっと楽に本人が起き上がれると思うのだが・・・」という声を聞き、研究会で介助バーを購入して持参。本人は「しっかり握れるからいいわね」と。

【評価～Gさんは新しい車椅子になってどう変化したか】

#### 1. 座り心地

一時的だが、シーティングのプロが現場に来て、直接身体機能を評価しながら車椅子を調整した結果、Gさんは傾きが軽減し、顔が前を向き、以前より楽に車椅子が自走できる状態になった。本人も1時間座っていても、「前の車椅子よりも格段にいい。疲れない。」と言っていた。しかし、せっかく調整した車椅子は1日しか使われずに元の自分の車椅子を使う状態に戻ってしまった。現状は以前と変わらない。

機能性、生理的、移動能力、外観、介護しやすさ、介護内容とともに、1日で元の車椅子になってしまい、何の変化もない。

**総合評価（シーティング援助によってどう生活が変化したのか）**

何も変わらなかった。変化はない。

**Gさんの事例に学んだこと**

Gさんの事例は、事前のアセスメントの重要性と新しい車椅子が本人の生活にしっかり入るためには、